

O-32 人工呼吸中の呼吸理学療法の確立に何が求められるか ～全国アンケートの結果から～

兵庫医科大学リハビリテーションセンター¹⁾

日本理学療法士協会内部障害研究会²⁾

松田千春¹⁾ 眞淵敏¹⁾ 竹村雅俊¹⁾ 森沢知之¹⁾ 大高洋平¹⁾ 道免和久¹⁾ 高橋哲也²⁾ 石川朗²⁾

川俣幹雄²⁾ 北川知佳²⁾ 熊丸めぐみ²⁾ 神津玲²⁾ 千住秀明²⁾ 嶋崎晃²⁾ 佐野裕子²⁾ 西野学²⁾

【はじめに】呼吸理学療法(以下 CPT)は、集中治療室(以下 ICU)においても急性呼吸不全患者のケアに広く用いられている。また、対象疾患もその領域は多様化してきている。今回我々は人工呼吸管理中の患者に対する CPT の現状を把握し、今後の CPT 全体の発展と患者の利益を考察することを目的に、全国の理学療法士(以下 PT)のボランティア 21 名により人工呼吸器装着患者に関する CPT についてのアンケート調査を行った。

【対象】対象は各都道府県の中でも病床数の多い順に 10 施設・計 470 施設を抽出し、各施設の PT 部門と ICU 看護婦・士(以下 Ns)部門とした。

【方法】アンケート形式は郵送による回答選択方式で、一部自己記述式とした。今回はその内 PT 部門 5 項目、Ns 部門 6 項目(うち共通 5 項目)につき検討した。CPT を施行している施設の内、PT 及び Ns 部門で行っている施設を PT・Ns 群、PT の回答から PT のみが施行している施設を PT 群、Ns の回答から Ns のみが施行している施設を Ns 群とした。

【結果】回収率は PT 部門 57.4%・271 施設、Ns 部門 38.5%・181 施設、人工呼吸中に CPT を施行しているのは 287 施設、そのうち PT・Ns 群は 189 施設、PT 群は 39 施設、Ns 群は 59 施設であった。CPT 施行の目的は、三群に共通して痰の移動を主目的に施行していた。他に PT・Ns 群及び Ns 群では無気肺・酸素化の改善という目的が多かった。PT 群では胸郭可動域改善及び呼吸法の獲得という目的が多く、目的の違いが明らかになった。CPT の内容は PT・Ns 群および PT 群で呼吸介助法、四肢の関節可動域訓練および筋力増強の順に高かった。Ns 群では吸引、体位ドレナージの順であった。他職種との連携が良

好であったものは、PT・Ns 群で 29.2%、PT 群では 23.6%で、Ns 群では 13.6%と低値を示した。院内で CPT の勉強会を定期的に行っている施設は、PT・Ns 群で 6.0%、PT 群で 8.1%、Ns 群では 1.9%であった。さらに、Ns 全体の回答から CPT に関して Ns が PT に期待するは、知識・技術の指導が 63.1%と高く、専従できる PT の業務体制、他職種との連携の順であった。また、連携の悪い群では他職種との連携を良くして欲しいという希望が有意に高かった。

【考察】PT 及び Ns が CPT を施行している施設では、その内容にも各々の専門性が反映され、他職種との連携も良好と回答したものが多かった。これは十分なチーム医療がなされている可能性を示唆している。連携が悪いと回答した Ns においても、PT に他職種との連携をとることを期待していることがわかった。しかし、PT 部門ではマンパワー不足と CPT に専従できる体制の確立がなされていない施設が多数であり、24 時間体制で患者のケアにあたる Ns が CPT を施行しているのが現状である。Ns の PT に対するニーズは高く、知識・技術の指導や、専従できる体制の確立が望まれていること等から、PT には CPT の実践のみならず、勉強会の開催などを通して、専門的な知識と技術を普及する必要性があると考ええる。さらに積極的にチーム医療に参画していくことで、包括的かつ体系的な CPT が実践されていくと考える。

【まとめ】今回の調査結果から CPT の現場で生じている問題点の一部が明らかになったと思われる。CPT の発展と医療従事者と患者が真の満足を得るためには、その治療が科学的に有効であることを証明し、他職種の専門家が高度な知識と技術を必要に応じて提供できる医療体制が必要であると考ええる。